

「東広島精神保健福祉ボランティア講座」の価値と課題の検討

——実行委員の立場から——

中 村 卓 治

The discussion about the worth and problem of
“A mental health welfare volunteer lecture in Higashi Hiroshima City group”

——From a situation of a member of the executive committee——

Takuji Nakamura

1. は じ め に

(1) 研究の動機と目的

筆者は教育現場に入るまで、精神科病院のソーシャルワーカーとして現場実践を行ってきた。筆者の実践においては第一義的に、入院患者に対する個別援助を行うことが大きな役割ではあったが、ソーシャルワーカーとしての専門的視点や姿勢に大きな影響を与えたもののひとつは、地域における社会福祉援助実践、いわゆる「コミュニティワーク」であった。

コミュニティワークは、住民のニーズに基づき、必要なネットワークを形成し、サービスを整備・開拓するといった、地域に必要な作業を展開していくことを目的とする。精神科領域では、その作業において精神障害者（以下、「障害当事者」とする）に対する差別偏見の除去、換言すると「普及啓発活動」が必要不可欠とされてきた。

1980年代、精神科領域の法律である「精神保健法」の成立以降、障害当事者の社会復帰や地域生活支援といった言葉が盛んに叫ばれるようになり、ボランティアの養成や地域住民の理解の促進を目的として、各地で「精神保健福祉ボランティア講座」^{注1)}が徐々に開催されるようになった。筆者の実践の地である東広島市においても、1994年度より東広島地域保健所^{注2)}主催の「東広島精神保健ボランティア講座」^{注3)}（以下「当講座」とする）が開催され、今年で13年目を迎える。この間に250名を越える修了生を送り出してきた。^{注4)}

冒頭に述べたように、実行委員としての当講座へのかかわりが、筆者のソーシャルワーク実践に多大なる影響を与え、専門家としての「拠り所」「指針」となってきたのである。

当講座には不変の価値を持つものもあるが、13年間という歳月が変化・熟成させたもののや、講座を通して出会った人々から気付き学ばされたものも数多くある。講座の実践を継続してこなければ、獲得できない貴重なものが多数存在するのである。

本論文では、当講座を準備・運営する実行委員の立場から、地域において普及啓発活動を展開し続けることがかかわりを持つ者達に対しどのような「影響」を与え、そこにどのような「価値」が生まれるのかを明らかにする。一方で、13年間という歳月は精神科領域を大きく様変わりさせ、我々実行委員会を取り巻く状況や当講座に対するニーズも多様な変化を求められている。そこで、今後実行委員として取り組むべき課題を明らかにし、それに向けた対策を考える。

研究方法としては、当講座に関する刊行物とこれまでの講座資料、及び受講生からのアンケートを活用する。

(2) 精神保健福祉ボランティア講座とは

東広島市の取り組みを紹介する前に、まず全国で展開されている精神保健福祉ボランティア講座の歴史と現状について触れておく。

精神保健福祉ボランティア講座は、専門家の養成をめざすものではなく、受講生である一般市民が互いに啓発しあいながら、障害者と共に生きる地域社会を作ることを目的として全国で開催されている。

講座の修了生の中には、「精神保健福祉ボランティア」として、障害当事者の生活を支え、障害当事者と共に生きる社会作りをめざして具体的な活動をする者もあり、障害当事者が孤立しがちな社会の中で、障害当事者と市民との「橋渡し」の機能や障害当事者の「生活の質」を高める機能などの独自機能を持っている。

精神保健福祉ボランティア講座をわが国で初めて開催したのは、神奈川県である。

昭和50年代後半、神奈川県社会福祉協議会が、家族からの要望により、障害当事者への訪問支援に着手したところ、実際の援助場面でうまくコミュニケーションがとれないなどの様々な困難に直面し、あらためて精神障害者の病気の特性や気持ち、そして、具体的な支援方法などを理解し体系的にボランティア活動などを進めることの必要性を実感し、1984（昭和59）年10月に神奈川県社会福祉協議会主催で全国初の精神保健福祉ボランティア講座^{注5）}を開講した。受講生は主婦、会社員、学生、教員など様々である。以来、年々修了生を輩出し、活動の場を精力的に広げている。

神奈川県でのこうした取り組みは様々なメディアで紹介され、その後全国各地の社会福祉協議会や精神保健福祉センターなどが中心となって精神保健福祉ボランティア講座を実施しはじめた。そこでの修了生は同じ市民としての「対等な関係性」、「素人性」、「自発性」などを活かしながら多様な活動を行うようになっている。

わが国は諸外国に比べると、一般市民の精神保健福祉に対する認識や関心の度合いが極端に低い状況にあるため、精神保健福祉領域を取り巻く状況に関心を持ってもらうための普及啓発に目的を絞った講座を開講するところも数多く存在する。^{注6）}

2. 東広島精神保健福祉ボランティア講座の概要

(1) 誕生の経緯

東広島地域保健所の働きかけで、「東広島精神保健ボランティア講座」の第一回実施に向けた実行委員会が、前年度から10回近く開催される。委員会の回数が多いことの要因の一つは、実行委員間の関係づくりに時間が必要であったためである。

その当時の実行委員は、地域保健所の保健婦、社会福祉協議会のコミュニティワーカー、小規模作業所の指導員、地域家族会の役員、そして医療機関のソーシャルワーカーとしての筆者であった。しかし、当時では互いが連携しながら障害当事者に対する支援を行う機会は皆無に等しく、恥かしい話ではあるが、筆者自身もその会議が他機関職員との初顔合わせの場となってしまう。それぞれの機関で障害当事者に対する支援を熱心に行ってきたことは事実であるが、障害当事者支援のための機関同士の「連携」はほとんどできていなかったことがうかがえる。

その当時、東広島市において障害当事者の地域生活を支える唯一の民間サービス提供機関は

小規模作業所一箇所のみであった。そこにかかわりをもつボランティアから「障害当事者へのかかわり方がわからない」とあがってきたニーズに応える形で、東広島地域保健所が地域保健活動の一環として当事業を開始したのである。

(2) 講座における障害当事者の位置付け

開始当初の当講座の目的は「精神保健の普及啓発を行い、地域で支えてくれる人を増やす」ことであった。精神保健法成立以前の施策方針により長期入院を余儀なくされた社会的入院患者を、地域で支えるためのボランティアあるいは良き理解者を養成することを当講座でめざしたのである。

1980年代後半以降の障害当事者に対する社会復帰施策において、精神保健の普及啓発はわが国目下の取り組み課題であり、理解者を増やすことが必要なことは間違いのない事実であった。しかし、当時の実行委員の意識の中でさえ障害当事者は単に「守るべき」「市民に対し理解を求めるべき」対象者でしかなく、そのため、障害当事者を闘病体験を語るための講師として講座に招くことはあっても、精神保健福祉の普及啓発のために我々と共に講座を作っていく「同志」としての意識をなかなかもてなかったことを今更ながら恥ずかしく感じている。精神病になりたくてなったわけではないにしろ、精神科領域での主役は間違いなく障害当事者自身であり、障害者の立場から地域社会へ働きかけていく責務や役割があること。それを果たす機会がまさに当講座であることを実行委員が気付き、障害当事者にも準備段階から運営に携わってもらい始めたのは、講座を開始して何年も後のこととなる。

現在では、受講生も一般市民だけでなく、障害当事者、家族、専門家、学生、民生委員と幅広い立場の者が集い、講座の目的も単なるメンタルヘルスの知識の提供や、障害者理解にとどまることなく、精神科領域から東広島という地域に対し何が貢献できるのかを共に考える場として当講座を開催するに至っている。

(3) 実行委員会の体制

当講座の実行委員会は、東広島市内の精神科領域に関連する施設や行政機関の職員で構成されている。もちろん全ての機関が開始当初から集結しているわけではなく、人的余力のないクリニックやソーシャルワーカーのいない医療機関は参加をしていなかった。市の行政も1999（平成11）年の改正精神保健福祉法により精神障害者の福祉サービスを担うことになるまでは、協賛はするものの「担当部署がはっきりしない」との理由で実行委員の派遣はなかった。

しかし、13年経った今では東広島市内にある精神科領域の関係機関のほとんど全てが実行委員会に携わり、その他にも精神障害当事者やボランティア講座修了生も当講座の運営に参画している。

表1 実行委員会の構成員の変化

実施年度	実行委員の内訳
1994年度（第1回）	<ul style="list-style-type: none"> ・ 東広島地域保健所 保健師（2名） ・ 東広島市社会福祉協議会 コミュニティワーカー（1名） ・ 賀茂東広島地区精神障害者家族会（1名） ・ 仲よし共同作業所 作業指導員（1名） ・ 宗近病院 ソーシャルワーカー（1名） <p>計 6名</p>

2006 年度（第 13 回）	<ul style="list-style-type: none"> ・ 東広島地域保健所 保健師（1 名） ・ 東広島市 社会福祉課 保健師（1 名） ・ 東広島市社会福祉協議会 コミュニティワーカー（1 名） ・ 社会福祉法人しらとり会 地域生活支援センターまほろば ソーシャルワーカー（2 名） ・ ふれあい共同作業所 作業指導員（1 名） ・ なごみ作業所 施設長（1 名） ・ 精神障害当事者（2 名） ・ 賀茂精神医療センター ソーシャルワーカー（1 名） ・ エトワール西条病院 ソーシャルワーカー（1 名） ・ 宗近病院 ソーシャルワーカー（1 名） ・ 広島文教女子大学 教員（1 名） <p>計 13 名 ※ 現時点では 12 月開催に向けた準備を進めている段階である</p>
-----------------	---

（4）講座の方向性

当講座を開始した当初は、何の疑いもなく市民に精神保健の知識を提供し、精神科領域で活動するボランティアを育成することをめざしていた。しかし活動が続けていくうちに、「普及啓発」と「人材育成」をひとつの講座で両立させることの困難性と、講座の方向性を単に障害当事者に対する理解にとどめてしまうと、障害当事者に対する同情は高まるものの、精神障害やメンタルヘルスの問題が受講生にとっては他人事になってしまいがちであることが講座修了生の感想から明らかとなった。

その反省により、現在では「精神保健福祉ボランティア講座」と称しながらも、「ボランティアとはお互い様の人間関係のこと」と位置付け、自分自身を大切にするためには自らが暮らす地域社会に関心を持ち、自分なりの形で地域に貢献する（関わりを持つ）ことの必要性を理解してもらうことを当講座の目的としている。換言すれば、精神科領域の知識や現状を知り、心の健康に関心を持つことから、今の自分自身の存在をかけがえのないものと感じ、周りの人間関係をいとおしく思えるようなきっかけの場面として当講座を設定しているのである。そのため、受講生の内発的動機が高まったときに、具体的なボランティア活動の支援をすることにして、あくまで基本は「受講生自身」と「自らが生きる地域」に焦点を当て、その関心を高める講座作りに努めている。

講座開始当初は、実行委員や障害当事者が受講生と意識の上で対峙するような位置関係にあった。サービスを提供する側と受ける側といった一方通行の関係である。しかし、現在では講座の目指す方向性の変化に伴い、実行委員、障害当事者、受講生が立場を越えて双方向に刺激し合い、意識の上では同じ方向に向かう同志として、自らの人生や暮らしの場をいかに豊かなものにしていけるかを共に考えていく関係に変化しているのである。

（5）講座プログラムの特徴

単なる障害当事者に対する理解が講座のゴールではないことは前述したとおりであるが、そのための工夫として、現在ではプログラムを表 2 のような流れで展開している。

「ボランティア」や「ライフサイクル」、「心の病気」についての話を行う際には、それが受講生自身の生活や人生にどのように関係しているのかについての説明に力点をおき、いわゆる

「他人事の世界」の話にならないように留意している。また、精神科領域に関する話題はあくまでその先にある「ノーマライゼーションを志向する地域づくり」に向けた導入部分であって、決して精神科領域の話だけでゴールに至らないように努めている。

グループワークや体験実習も、障害当事者に対する話題に終始するのではなく、事実を知った自分に「どのような感情が生まれ」、「どのような自分の意識に気付いたか」といった受講生自身に焦点を当てた展開を図っている。いわゆる「自己覚知」に向けた作業である。そのことが結果として、表3に見られるような「メンタルヘルス」や「豊かな地域づくり」への関心を高め、受講生が当事者性を持ちながら当講座に臨むことを可能にしているといえる。

表2 講座の基本プログラム

回数	講義の目的	講義の内容
第1回	講座の開講目的について理解する	<ul style="list-style-type: none"> ○ 講座のオリエンテーション ○ 受講生同士の関係作り（レクリエーションと自己紹介） ○ 講義 「ボランティアとは」 ○ グループワーク
第2回	心の健康と私たちの生活との関係についての理解を深める	<ul style="list-style-type: none"> ○ 講義 「ライフサイクルから見た私たちの心の健康」 ○ グループワーク
第3回	現場体験を通して精神障害者への理解を深める	<ul style="list-style-type: none"> ○ 体験実習①
第4回	病気（精神疾患）について正しく理解する	<ul style="list-style-type: none"> ○ 講義 「病気の理解～統合失調症を中心に～」 ○ グループワーク
第5回	精神障害者の処遇の歴史と現状について理解する	<ul style="list-style-type: none"> ○ 講義 「精神保健福祉の歴史」 ○ 講義 「精神保健福祉の現状と将来」 ○ 講義 「東広島市における精神保健福祉の取り組み」 ○ グループワーク
第6回	障害当事者や家族の声を受け、誰もが自分らしい暮らしができることの必要性について考える	<ul style="list-style-type: none"> ○ 体験発表「当事者・家族の声から」 ○ グループワーク
第7回	現場体験を通して精神障害者への理解を深める	<ul style="list-style-type: none"> ○ 体験実習②
第8回	これまでの体験実習や講義、体験発表を受けて、今後の自分の生活について考える	<ul style="list-style-type: none"> ○ 受講生からの質問に答える ○ ボランティア活動紹介 ○ 講義 「講座のまとめ」 ○ グループワーク ○ 修了証授与

表3 平成17年度受講生の講座終了後のアンケート結果（項目の一部抜粋）

1. 講座の受講目的は達成できましたか。それはどのようなことですか。
 - ・障害があるないに関わらず、一人の人間として接していく事が大切だということを学んだ。
 - ・障害者への関わり方が何となく分かったように思う。
 - ・当事者または家族の方のお話を伺うことができ、本人の思い、家族の苦しみ、悩みを聞くことができてとてもよかったです。他の講座ではない体験でした。
 - ・昨年主人が他界して色々考えることが多く、自分自身の事も大切にしようと思った。
 - ・毎日の生活サイクルを見つめ直し「できる事しかできないよね」という開き直りが大切だと思った。
 - ・講座の目的は分かりましたが、今後の目的がまだ……
 - ・講座は分かりやすかったので、理解できたと思う。
 - ・講座で障害に対する勉強ができ、体験実習でも違和感なく障害者と接することができたので、これからは普通に接していこうと思います。
 - ・障害者の方の理解とまではいかないまでも、受講前と比較すると知ることはできた。
 - ・時間の余裕がなかったのであまり納得（理解）できない部分もありましたが、地域とのつながりを考える事ができたので良かったです。
 - ・もう少し色んなことを勉強してみたい。
2. あなたにとってボランティアとはどのようなものですか。講座前と講座後でのイメージの変化についても教えてください。
 - ・自分ができる小さなことを見つけること。
 - ・地域であり見かけることのない統合失調症、不登校、引きこもり、うつ病を抱えていらっしゃる人に、身近な地域や近所で支えていきたいと思ったこと。
 - ・自分ができることをするという考え方は変わりませんが、その場その場の状態に合わせて行動する難しさに気付いた。
 - ・ボランティアは地域での関わり合いや少々のおせっかいであるということ。
 - ・受講前のボランティアとは「助ける」「手伝う」というイメージでした。
 - ・ボランティア＝「おせっかい」「世話焼き」というイメージ。
 - ・自分を高めるものであり、自分を含めて皆が生活しやすい地域をつくることである。
 - ・ボランティアという言葉はあまり好きではありません。受講前は何か構えてするように感じておりましたが、受講後は自然に身近なところからできるものであることを理解しました。
 - ・助け合っていきたい。
 - ・やはり受講後の感想としても、ボランティアは自分が学ぶ事が多いと思う。
 - ・自分の空いた時間を利用して動けたら良いと思いました。
 - ・自分のできることから参加していく事だと考えられるようになった。
 - ・人とのつながりになる「きっかけ」だと思いました。
 - ・隣のおばちゃん的な感覚でしていけばいいものだと思う。
3. 今後、精神保健福祉ボランティア活動に関わっていきたいと思いますか。
 - ・色々な障害があるので、できるだけ多くのことを知り、理解したいと思います。
 - ・特に精神保健福祉に限らず、情報があればそれを見て参加していきたいです。
 - ・実際にボランティア活動をするだけでもできれば良いと思いますが、それ以上に意識を持って生活していけたらと思います。
 - ・ボランティアを通し、同じ人間としてともに成長していきたい。
 - ・少しでも自分にできることがあれば、ボランティア活動に関わっていきたいと思います。
 - ・皆同じ人間なので偏見や差別意識を持たないで、自然体で気付いたことをする。
 - ・とても忙しい生活をしているので日常的にどんどんという訳にはいかないですが、機会があればと思います。
 - ・「自分に何ができるかな？」と思う気持ちが大きいです。ボランティア活動はやって見たいです。

- ・精神障害者の人達が社会に携わっていくことが大切だと思います。
- ・私で役立つ事があれば少しでも関わりたいと思います。

4. 「思う」を選択された方にお聞きします。今後どのようなボランティア活動がしてみたいですか。
- ・特にこれという希望はありません。障害者の人が困っている時に手を差し伸べられる人間でありたいと常に思っております。一緒に楽しく活動できる事が何よりの楽しみです。
 - ・生活していく上で小さなちょっとしたことで協力できる事があれば、ボランティア活動をしていきたいと思います。
 - ・交流会
 - ・活動を知る事があまりないので、わかれば参加できる時にできるだけ参加したいと思います。
 - ・地域でのボランティアやお手伝い。
 - ・今は分かりませんが、自分が参加できる行事等、意識的に広報等で見つけて参加したいと思います。
 - ・作業所のお手伝いなど人との関わりをして役に立っていかれたらと思います。(食事、掃除、洗濯、話し相手など)

※ 東広島精神保健福祉ボランティア講座の発展に役立てることを目的としてアンケートに協力をしていただいているが、受講生の個人情報保護のため、本人を特定できる可能性のある内容に関しては文章の一部修正を行っていること、また理解しやすいように文章表現の統一を図っていることをご了承ください。

3. 東広島精神保健福祉ボランティア講座の意義

実行委員会では、当講座の（存在）意義を以下のようにまとめている。

① 市民に対する普及啓発の場として

当講座はただ単に精神障害者に対する理解や協力を求める場といったものではない。メンタルヘルスという観点からいえば、精神保健福祉は国民の誰もが関心と責任を持つべき領域である。ライフサイクルを学び、自己の心の健康に関心を持つ機会を得ることが、精神保健福祉を「他人事」から「自己の問題」として取り組むためのきっかけを与えることとなる。

② 障害当事者の支え手に対するサポートの場として

当講座を始めたころは、障害当事者家族や民生委員など精神障害者に対しなんらかの関係を持つ者の参加が多くあった。これは保健師や作業所職員の働きかけによるものであったが、障害当事者の身近にかかわりを持つインフォーマル・サービスとしての彼らが正しい知識を持つこと、あるいは当講座内で自分たちの気持ちを開示しそれが受容されることで、障害当事者へのかかわりに違いが生まれてくることは大変重要なことである。

③ 障害当事者自身の自己受容の場として

障害当事者自身が講座の講師を担うことや実行委員として企画・運営に携わるといった経験が、自らの障害を受容し、自己に対する理解を深める機会となる。

④ サービス提供チームの熟成の場として

考えられる限りのサービス提供機関を召集しさえすれば、それでチームとして効果的なサービスを即展開できるといったものではない。個別援助と同じく、対象者に対しかわりを重ね続ける中で、徐々にサービスとしての質を熟成させていくものである。

⑤ 実行委員各々の本来業務への還元

当講座で体験した出来事やそこで築いた人間関係は、所属する機関や本来業務にも生か

され、様々な効果をもたらすことになる。

⑥ 実行委員の専門性に対するフィードバックの場として

当講座を障害当事者や地域住民の真のニーズを受け止める場とすることで、実行委員自身の専門性を振り返り、実践を問いただす機会とすることができる。

⑦ サービス開拓の場として

当講座が普及啓発の次に目指すものとして、障害当事者を支えるサービスの開拓があげられる。実行委員会がサービス提供チームとしての質を上げること。かかわる障害当事者が社会的役割や責務に目覚めること。受講生である民生委員や精神科領域に従事する者が、かかわりの質を上げること。そして、今までかかわりのなかった一般市民がボランティアとして地域におけるインフォーマル・サービスの役割を担うこと。当講座はそのきっかけの場となりうるのである。

この報告で明らかなことは、まず一点目として、市民に対する普及啓発活動の実践が、受講生に対してだけでなく、講座を運営するサービス提供チームに対して、あるいは実行委員各々の業務に対して様々な影響を与えていることである。例えば我々ソーシャルワーカーは、対象によって使用するソーシャルワークの技法を変えはするが、専門的な視点や姿勢を変えるわけではない。ようするに当講座で取り組んだこうした社会福祉実践は、別の実践場面にも違いを生むのである。

二点目は、サービス提供チームを「ひとつの有効なサービス」として機能・成立させるためには、チーム内での継続した共有体験が必要となることである。現在、医療や福祉の現場では「ケア・マネジメント」や「チーム・アプローチ」の重要性がクローズアップされているが、いずれもただ単にサービスを組み合わせたり、多職種で役割分担を行えば成立するというものではない。そこに集う者の価値に基づかれた専門性や個々の提供可能なサービスは異なれど、多職種やサービス提供事業所がその対象に「どのようにかかわり」「何をゴールとして」集っているのかをチーム内で明らかにし、納得し、共通の「価値」を育てることが必要である。そのためには、共有体験、いわゆる共に実践していくことの「継続」がサービス提供チームのメンバーを結束させ、「ひとつの有効なサービス」としての熟成を図ることを可能にする。こうしてサービス提供チームが自立したサービスとして機能し始めれば、その後は様々な場面でそれを臨機応変に活用し、対象（者）のニーズに基づかれたサービス提供が展開できるようになるのである。

4. 考 察

（1）東広島精神保健福祉ボランティア講座の「価値」

当講座が我々に与えた「影響」は数限りないが、特に「ノーマライゼーション」の真の意味を実行委員自身があらためて実感できたことの意義は大きい。ノーマライゼーションは特定の者を養護するための概念ではない。様々な立場の者が互いを尊重し、同じ方向に向かうための共同作業の中で確保されるべき概念なのである。その考えを、実践の中から導き出すことができたのは意義深いことであった。

もし、当講座において向かうべき先が障害当事者に対する理解であり続けるとすれば、障害当事者はその作業において対象者でありながらも皆の作業の仲間入りはできないことになる。そうならないためにも精神科領域を入り口として、豊かな地域作りを皆で考えていくことをめ

ざす現在の流れが必要であり、それによって精神に障害を負った者の立場から見えてくる地域に対する「役割」や「力」を障害当事者自身が意識することができるようになる。そのことを我々実行委員は当講座での作業を継続していく中で次第に気付かされたのである。

驚いたことに、我々実行委員がこの考えに至ってより、講座に参加する障害当事者側の意識も変化をみせ始めた。単に講座を受講し修了するのではなく、地域社会に対し今の自分にどのような貢献ができるのか自己の「存在事由」の模索を始めたのである。結果として、主体的に当講座の運営にかかわる者、講師として自らの体験や考えを講座の中で自分らしく表現する者、障害者や高齢者領域で支援者として活動を始める者など、自らの立場を生かした活動を通して、存在の肯定化作業に取り組んでいるのである。

こうした障害当事者のエンパワーメント^{注7)}を志向する活動のきっかけは、当講座が彼らに真の「内発的動機」をもたらしたことによる。このように講座にかかわる者達がエンパワーしていくきっかけを与えることこそが当講座の「価値」といえるのである。

障害当事者の社会復帰は、地域住民の理解や協力を求める普及啓発活動抜きには実現できないことは確かである。しかし、そうした普及啓発活動と同じくらい、障害当事者自身がエンパワーし意識を変革していくことが、彼らが社会生活を送る上で必要かつ有効なプロセスなのである。

また、こうしたプロセスは決して障害当事者だけに有効なものではない。当講座は、立場に関係なく、かわりを持つ全ての者にとって、人としていかに「生きる」べきかということを考える場となっている。この「生きる」上で必要なエネルギーは、自らの存在事由を見出すことで確保されているのである。市民が地域に貢献することの意義はそこにある。人は他者とのかわりを通して、他者の中に自己が生きている（存在している）ことを確認できて初めてエンパワーしていくのである。役割や立場は異なれど、人間同士のかかわりの営みはこうした双方向の「生きる」ためのエネルギーを生み出している。それは障害・健常の別を問わず、人間が生きていく上で必要なことであり、その仕組みに気づき、エンパワーしていくきっかけの場が当講座に他ならないのである。

また、実行委員会側から「ボランティアという形」を提示したり強要したりしない姿勢が、逆に受講生の内発的動機を高め、自らの生きる形をそれぞれ自由に模索できることを保障しているともいえ、その主体性の保障も当講座の「価値」と考えている。

(2) 東広島精神保健福祉ボランティア講座の「課題」

「精神障害という特別な領域にかかわる」という意識ではなく、「精神科領域から地域に対し何が貢献できるのかを共に考える場である」という当講座の姿勢は、実行委員の拠り所でもあり、決して間違った方向性ではないと自負している。しかし、その一方で我々を取り巻く医療・福祉の状況は刻一刻と変化を遂げ、特に社会的弱者においては生活のしづらさが増していることは事実である。

障害者領域において今春から施行された「障害者自立支援法」は、障害者をサービス利用者と位置付け、公的サービスの利用に対しては原則として応益負担を強いている。あらゆる公的サービスが有料化される中において、インフォーマル・サービスを中心とした「ソーシャル・サポート・ネットワーク」の構築は早急なる取り組み課題である。東広島市において現実に障害者が活用できるインフォーマル・マンパワー育成の課題は、まさに当実行委員会に突きつけられているといえよう。

当講座を修了した後に、ボランティアという形で実践を望む受講生のニーズにしっかりと応

え、対人援助のスキルを有したボランティアグループの育成プログラムについて早急に検討する必要がある。

もう一点は、当講座を運営するための安定的な財政基盤の確保である。当講座の開始当初は東広島地域保健所が主催し、運営資金も地域保健所で予算化がなされていた。その後社会福祉協議会に主催が移譲され、現在は東広島市の委託事業として精神障害者地域生活支援センターが主催を担っているが、障害者自立支援法による精神障害者地域生活支援センター事業の廃止や市町村の緊縮財政などにより、当講座の実績は評価されても運営面の財政的支援が不透明な状況にある。東広島市の貴重なサービスとして、当講座が開催され続けることができるよう今後も継続した活動を行っていくと共に、インフォーマル・サービスの開発の必要性を明らかにし、それに対する当講座の存在価値を行政に対しアピールしていくことの必要性を実感している。それも我々実行委員だけでなく、講座を修了した一般市民や障害当事者と共にである。

(3) 結 論

ソーシャルワークはクライアントの「エンパワーメント」を志向する。エンパワーメントとは、例えば精神障害者であれば、精神病を患うことで奪われてしまった自尊心や自信、自らの力を回復していくプロセスをさす。ソーシャルワーカーはクライアントとのかかわりの中で、このエンパワーメントをめざしソーシャルワークを展開することになる。しかし実際にエンパワーメントを獲得する作業は、けっして容易なことではない。なぜならば、そのためにはクライアント自身が人生を肯定し、自らの存在事由を見出す機会を得なければならないからである。

個別援助においては、エンパワーメントの獲得に向け「主体性の尊重」や「自己決定の保障」といった援助者側のかかわり方を重要視するが、大きな生活課題を抱え専門的援助を必要とする立場の者が、そうした援助者側のかかわり方だけで意識を変化させることは、実際の援助場面では皆無である。エンパワーメントには、個別援助だけでなく障害当事者が主体的に臨むための「舞台づくり」「人間関係づくり」「機会（チャンス）づくり」も欠かせない要素なのである。それを考える時、当講座の存在はエンパワーメントを実現ならしめる要素を含んでいると言えるはしないだろうか。

さらに田中（2001）が、精神保健福祉援助の特性とする「疾病」「障害」「健全さ」に対応するものの実践的区分と統合された援助的モデルの必要性に言及しているが、その中で我々実行委員と同じ視点でその重要性を述べている。

健全さへの対応は、精神障害を持つ人々と持たない人々が同じ地域で共に生きる社会作りをめざして、地域での様々な活動と交流の場を共有することから始まる。また、これらの対応は、精神障害者に仲間、家族、非当事者市民、専門家、それぞれの立場からの分かち合い、育て合い、支え合いを求めてきている。それは、地域を基盤とした包括的なネットワークと総合的な支援を必要としており、その主体性は直接的には精神障害当事者ではあっても、各々がパートナーとして地域で暮らす基盤を拡大するものである。それゆえ、地域保健福祉サービスの受給者はすべての市民であり、同時にその供給者は精神障害者も含んだすべての市民である。

当講座では、まさにこの考え方にに基づき実践を行ってきたわけであり、実際にコミュニティワークを展開する中でその実現が可能であることを実証できたことは、非常に嬉しい限りであ

る。

障害当事者のエンパワーメントのみならず、人が生きる上では何かしらの「存在事由」が必要であり、それは他者とのかかわりにおいて確認されそこから生きるエネルギーが与えられることや、豊かな地域社会を目指すための取り組みは、結果として自己の人生にフィードバックされるものであることなどが当講座を継続していく中で明らかとなったことも、当講座の存在価値を高める理由の一つとなった。

筆者の現在の立場においては、学生を支援する場面でソーシャルワークスキルを活用することはあっても、利用契約に基づかれたケースワークを展開することは不可能である。しかし本論文において、コミュニティワークの実践が、ソーシャルワーカーとしての視点や姿勢に十分に反映されることが明らかとなったいま、教育現場に身を置きながらもいちソーシャルワーカーとして実践し続けることのできる形を今後も模索し続けながら、その成果を本学におけるソーシャルワーク教育に還元していきたいと考える。

注

1. 1980年代にわが国に始めて誕生した時は「精神衛生ボランティア講座」と呼ばれていたものが、「精神保健ボランティア講座」へ、現在では「精神保健福祉ボランティア講座」と時代の流れに伴い名称を変化させている。しかし基本的な目的及び内容に大きな変更は無い。本論文では必要な箇所以外は「精神保健福祉ボランティア講座」で統一した表現を使用する。
2. 1994年当時は「東広島保健所」であったが、本論文では「東広島地域保健所」で統一した表現を使用する。
3. 現在は「東広島精神保健福祉ボランティア講座」と名前を変えている。
4. 現在の主催は、「精神障害者地域生活支援センター まほろば」である。
5. この当時は「精神衛生ボランティア講座」と呼ばれていた。
6. 普及啓発を目的にしている場合は「精神保健福祉講座」と名づけ、ボランティアの養成を切り離し、目的を明確にして講座を実施している所もある。
7. エンパワーメントとは、社会的に不利な状況に置かれた人々が、その問題状況を自ら改善する力を高め、主体的にその状況の改善に向けて取り組んでいく過程のことである。

文 献

- 今中博之 関川芳孝「限りなく広がる才能～アートを通じたエンパワメント～」『月間福祉』Vol.88 No.10, 全社協, (2005) pp.66-73
- 原田正樹「ボランティアの担い手を養成し、福祉のまちづくりにつなげる社協の役割」『月間福祉』Vol.89 No.2, 全社協, (2006) pp.90-95
- 「転換期の精神病院 コミュニティとの共存をめざして ボランティアが地域とのパイプ役として活躍し病院が変わる」『ゆうゆう』Vol.32, 萌文社, (1997) pp.42-49
- 「精神保健ボランティア 街に風を運ぶ人たち」『ゆうゆう』Vol.23, 萌文社, (1994) pp.8-41
- 「ふだん着のくつろぎを育てる」『ゆうゆう』Vol.5, 萌文社, (1989) pp.44-50
- 今井博康「地域を拓く精神保健ボランティア」『精神保健福祉』Vol.61, へるす出版, (2005) pp.15-18
- 旗本春美「市が地域に拠点を設置し、ネットワークを広げる」『Review』Vol.46, ぜんかれん, (2003) pp.10-13
- 伊藤秀幸「精神障害者の生活支援と精神保健ボランティアの役割 全国実態調査の結果から」『精神保健福祉』Vol.43, へるす出版, (2000) pp.42-47
- 中村卓治 監修 東広島精神保健福祉ボランティア講座記念誌作成委員会 編「のびやかな風になつて～つながつて、ひろがつて～東広島精神保健福祉ボランティア講座の10年」東広島精神保健福祉ボランティア講座実行委員会, (2006) pp.2-3 pp.6-7
- 中村卓治 編著「東広島精神保健福祉ボランティア講座テキスト」東広島精神保健福祉ボランティア講座実行委員会, (2006) p50

田中英樹 著「精神障害者の地域生活支援 統合的生活モデルとコミュニティソーシャルワーク」中央法規,
(2001) pp.54-55

公衆衛生精神保健研究会 著「ケアマネジメントと地域生活支援」中央法規, (1998) pp.107-115

社団法人日本精神保健福祉士協会日本精神保健福祉学会 監修「精神保健福祉用語辞典」中央法規, (2004)
p333

—平成 18 年 10 月 20 日 受理—